

## 中国の日本語学習者の物語描写における視座形成の実態

坂本 勝信、康 鳳麗、森脇 健夫

### The Actual Condition of “Vidual stance Formation” in Narrative Description of The Japanese Learner in China

Masanobu SAKAMOTO, Fengli KANG, Takeo MORIWAKI

#### 要 旨

中国人日本語学習者（以下CNS）の文章描写のわかりにくさは日本語母語話者（以下JNS）より視座の統一度が低いことが原因だが、日本語レベル上昇により、緩やかに上がるとする先行研究がある。しかし、筆者の知る限り、海外の日本語レベル中級前期・同後期のCNSに限定した調査は行われていない。本研究では、同対象者、及び、JNS（大学生）に対して行った、主人公の明確な漫画を「単に描写させた場合」（自由視座）と「主人公になりきって描写させた場合」（固定視座）の両面から横断的・縦断的に調査を実施し、その結果を比較対照して、日本語レベルとの関係において、「視座形成」の実態を明らかにした。以下主な結果を述べる。1）自由視座では、CNSは、JNSより「主人公のみ」の視座から描写する割合が低いが、日本語レベル上昇により、統一度は上がる。2）固定視座のほうが自由視座と比較し、大きく「主人公のみ」の視座から描写する割合が上がる。しかし、中級前期のレベルでは、JNSの視座統一度を大きく下回る。3）JNSは固定視座で、より受け身形や使役受身形、授受表現などの構文の手がかりを多く使い、主人公の視座から描写する傾向が強い。一方、CNSは固定視座のほうが主人公に言及する割合が高まるが、その構文の手がかりの使用回数がJNSほど増えることはなく、他の登場人物にも視座を移しながら描写する傾向が観察される。以上から、まず十分に構文の手がかりを単文、複文レベルで復習した上で、主人公の明確な漫画を主人公になりきり、自らの出来事と捉えて描写させるというように段階を踏んで指導するとよいと思われる。

**キーワード：**視座 視座統一度 自由視座 固定視座 構文の手がかり

#### Abstract

Previous studies suppose the problem of understanding Japanese which is produced by CNS (Native Chinese Speakers) is related to the low degree of unity of “vidual stance”. However, there is no research which limits to CNS of earlier and later period Japanese level intermediate overseas. This research reveals the actual conditions of “vidual stance formation” in relationship to Japanese level using a comparison “fixed” and “non fixed” vidual stance. The main result is as follows:

- 1) In the case (non fixed “vidual stance”), a low % of the students in the earlier period described the story by only using the main character’s vidual stance compared to JNS (Native Japanese Speakers), but the % increases as their Japanese improves.
- 2) In the case (fixed “vidual stance”), the % of description of the story using by main character’s “vidual stance” went up sharply compared to non fixed “vidual stance”. However, in the case of earlier period the degree of unity of vidual stance is much less than JNS.
- 3) JNS describe the main character in the case (fixed “vidual stance”) with more expressions of viewpoint such as passive form, causative passive form, give and receive expressions. On the other hand, CNS describe about main character in the case (fixed “vidual stance”) more than in the case (non fixed “vidual stance”). However, the number of times they use the expressions of viewpoint did not increase as Japanese. Furthermore the tendency described while moving “vidual stance” to other characters is observed.

**Keyword:** Vidual stance, the degree of unity of vidual stance, the expressions of viewpoint non fixed “vidual stance”, fixed “vidual stance”

## 1. はじめに

日本語学習者の産出する日本語のわかりにくさ・不自然さに「視点」の問題が関わるとする研究がある（渡邊 1993；田代 1995；坂本・康 2004；坂本 2005）。これらの研究では、ストーリーのある漫画の描写を通して、「視点」の実態を探っている。その結果、日本語母語話者（以下 JNS）は、主人公の視点から描写することが多いのに対し、日本語学習者は複数の視点から描く傾向があるとしている。一方で、JNSと日本国内における上級レベルの中国人日本語学習者（CNS）の口頭描写を対象に調査した先行研究の中には、両者に大きな違いはないとするものもある（武村 2010）。<sup>1)</sup> 文章表現においては、CNSを対象にした研究が蓄積され、徐々にCNSの視点の実態が明らかになってきている。視座（＝「見る場所」どこ（何）から見るのか）に着目すると、CNSの日本語レベルと視座の統一度の関係に関わる研究には、国内では、坂本（2005）、奥川（2007）があり、中級と上級を調査し、日本語レベルが上昇するに伴い、緩やかに視座が統一されていくと述べている。<sup>2)</sup> 海外では、林（2005）が台湾のCNSを調査し、学習時間が長くなるにつれ、一定の人物に視座を固定する傾向が強くなると報告している。しかしながら、海外の日本語レベル中級前期・後期のCNSに限定した調査は今のところ、行われてはいない。また、先行研究の調査の形態としては、ある時点のある学習者グループの実態を明らかにする横断的調査が主流であり、同じ対象者について、継続して変化の様子を追った縦断的調査は筆者の知る限り、見当たらない。

初級の学習は終わったが、日本語の熟達度においては、未完成である中級レベルの学習者に焦点を当て、視座の習得過程を明らかにすることは、視座の実態を把握し、その指導の必要性を探る上で意味があると考えられる。同時に、日本国内と比較して、自然な日本語のインプットが少ない海外の学習者を調査対象とすることで、学習環境の差による影響に対して、何らかの示唆を与える可能性もあるだろう。

そこで、本研究では、中国大陸で学ぶ日本語レベル中級前期と後期の学習者に対して、横断的・縦断的に「視座統一」の実態調査を実施した。

## 2. 調査の目的

本研究の主な目的は、JNS（大学生）との比較を通して、1）中国における日本語レベル中級のCNSの視座形成の実態を日本語レベルとの関係において明らかにすること、2）漫画を「単に描写させた場合」（自由視座）

と「主人公になりきって描写させた場合」（固定視座）とでは、どのような変化が生じるかを調査すること、である。

## 3. 先行研究

### 3.1 視座の定義に関する研究

松木（1992）は、文法研究においても、視点を視座（＝「見る場所」「どこ（何）から見るのか」と注視点（「見られる客体（対象）」「どこ（何）を見るのか」）に分けて分析することが必要だとしている。その後の諸研究（田代 1995；坂本・康 2004；坂本 2005；林 2005；坂本・康 2008）においては、多少の違いはあるが、受身形や授受動詞などを構文の手がかりとして決定されるものを「視座」とし、注視点と区別している。中浜・栗原（2006）は、ヴォイス・授受表現、移動動詞、主観表現、準感情表現、感情表現を、奥川（2007）は、授受（補助）動詞や移動動詞を構文の手がかりに「視座」を判断している。本研究の基準となる坂本（2005）について詳細に述べると、「視座」を受身形、授受補助動詞及び、本動詞「くれる／もらう」、「使役形／使役的他動詞」、本動詞「やる／あげる」、使役受身形によって、決定されるものとしている。

### 3.2 JNSとCNS視座の実態に関する研究

先行研究の多くは、ストーリーのある漫画を文章により描写させ、視座の実態を探っている。表1にJNSの結果を、表2にCNSの結果をまとめた。

表1 JNSの視座の実態

田代(1995):社会人・大学生 30名	「主人公のみ」の立場から描写することが最も多く、その割合も高い(60.0%)。
坂本(2005):大学生・大学院生 10名	「主人公のみ」の立場から描写することが最も多く、その割合も高い(70.0%)。
林(2005):大学生・大学院生 8名	「主人公」以外の登場人物に「視座」を据えることはない。
中浜・栗原(2006):20歳から39歳44名	約70.0%が「視座」を一人の人物に統一していた。
坂本・康(2008):大学生 91名	「主人公のみ」の立場から描写することが最も多く、その割合も高い(60.4%)。
奥川(2007):大学生・大学院生 20名	視座は一貫して主人公のみ(100%)。
筆者ら(2012):低・中・高学年児童、大学生各37名、17名、38名、46名	低・中学年児童は、「主人公のみ」の立場から描写することが最も多く(各50.0%、41.2%)、高学年児童・大学生は「主人公のみ」の立場からの描写が二番目に多い(各40.5%、39.1%)。

結果は次の通りである。JNSとCNSを比較して述べる。JNSは漫画を「その内容を知らない人」に説明するように描写させる場合（自由視座）、<sup>3)</sup> 視座を主人公に統一する傾向があるとする先行研究が多い（田代1995：60%、坂本2005：70%、坂本・康2008：60.4%、中浜・栗原2006：約70%）。また、アニメーションを使用した奥川（2007）は、ストーリー上重要なやり取りをする新登場（人）物の導入場面に焦点をあて、その場面における視点の移動の考察を行っている。その結果、JNSは、新登場（人）物に一時的に注視点を移動させるが、視座は主人公に固定したままであるとしている。

「視座の主人公への統一度とわかりやすさとの関係」を調査したものに坂本・康（2008）がある。注視点は不統一だが、視座を主人公に統一した描写文Aと注視点、視座共に不統一である描写文BをJNS 93名（大学生）に漫画とともに読ませ、どちらがわかりやすいか判断させ、その理由を自由形式で書かせている。その結果、JNSの8割以上が視座統一された文章を選び、うち75%が視座の統一に関わる根拠を挙げていたと述べている。これにより、視座統一は、わかりやすい文章描写において重視すべき要件の一つであるとしている。しかし、同研究とほぼ同じ内容を別の作者が描き変えた漫画を用いて、日本人児童と日本人大学生を対象にして、JNSの視座の実態を探った調査がある（筆者ら2009、2012）。これらの研究では、自由視座においては、先行研究ほどJNSの「主人公のみ」の視座から描写する割合が高くなかったと述べている（大学生：39.1%）。以上から判断すると、自由視座の場合、JNSは視座を統一させた文章のほうがわかりやすいと判断するが、実際の描写においては、すべての人が視座を主人公に統一して書くわけではなく、主人公と他の人物の視座から描く者も多いことを示唆している。同研究が指摘するように視座の統一の度合いは、描かれ方の微妙な違いによって変化する可能性もある。したがって、早計に「JNS＝視座を主人公に統一」と定式化することは避け、その傾向が強いといった程度の捉え方をしたほうがいだろう。

一方、CNSは、概ね「主人公のみ」の視座から描写することは少ない（田代1995：10.0%、坂本2005：15%）。奥川（2007）でも、「視座の主人公への固定」は、上級学習者においても全くできておらず、習得が難しいものと言えるとしている。以上をまとめると、CNSは、登場人物間で視座を移動しながら描写するという立場が多いようである（表2）。

表2 CNSの視座の実態

田代（1995）：30名（日本の大学、短大、留学生別科に在籍する中上級の学習者） <sup>4)</sup>	「主人公のみ」の視座から描写することは少ない（10.0%）。
坂本（2005）：20名（日本の日本語学校、大学に在籍する中級の学習者・日本の大学、大学院に在籍する上級の学習者各10名）	「主人公のみ」の視座から描写することは少ない（15.0%）。
林（2005）：43名（台湾の大学で日本語を専攻する学習者〔学習時間1年以上—2年未満、2年以上—3年未満、3年以上—6年未満の3群に分けた〕）	「主人公」以外の人物に視座を据える例が少数ながら見られた。
奥川（2007）：40名（日本の大学、大学に在籍する中級・上級の学習者各20名） <sup>5)</sup>	（注視点の新登場（人）物への移動をほとんど行わず）、行ったとしても視座を主人公に固定していない。

表3は、CNSの日本語レベル・学習年数と視座の統一度に関する研究についてまとめた。坂本（2005）は、日本語レベル上昇にともない、緩やかに視座統一度も上がることを報告している。奥川（2007）も日本語レベル上昇により、わずかながら視座の固定が観察されたことを報告している。林（2005）では、学習年数が長くなるにしたがって、談話を展開する際にある一定の人物に視座を固定する傾向が強まると述べている。

表3 CNSの日本語レベル・学習年数と視座統一度の関係

坂本（2005）：20名 *表2と同じ	日本語レベル上昇にともない、視座の統一度も緩やかに上がる。
林（2005）：43名 *表2と同じ	学習年数が長くなるにしたがって、談話を展開する際にある一定の人物に視座を固定する傾向が強まる。
奥川（2007）40名 *表2と同じ	日本語レベル上昇により、わずかながら視座の固定が観察された。

### 3.3 自由視座と固定視座（＜視座＞の固定）に関連する研究

表4は、自由視座と固定視座（＜視座＞の固定）の実態の異なりについて、関連する先行研究をまとめたもの

である。筆者ら（2012）は筆者ら（2009）にならい、「自由視座（ストーリー性のある漫画を自由に描写させた場合）」と「固定視座（主人公になりきって描写させた場合）」とでどのような変化が生じるかを調査している。また、魏（2010）<sup>6)</sup>も「特に制限なく自由に書く（＝自由視座）」Aグループと「特定の登場人物になったつもりで書く（＜視座＞の固定）」Bグループに分け、視点表現（＝構文的手がかり）の使用に影響する要因などを探っている。

筆者ら（2012）では、JNS（低・中・高学年児童・大学生）は、固定視座において、「主人公のみ」からの描写割合が自由視座と比較して、大幅に伸びたとしている。また、特定の主人公や途中で新たに加わる人物が存在しない漫画を用いて、CNS（上位群下位群に分別）とJNS（大学生・大学院生）を対象に調査した魏（2010）では、視点表現の使用量は、全ての項目でBグループのほうが多いとしている。<sup>7)</sup> また、CNS上位群は、授受表現と移動表現の使用がAグループより有意に多く、かつ視点表現の使用が全体的にJNSに近づく述べている。

表4 自由視座と固定視座（＜視座＞の固定）の実態

筆者ら（2012）：JNS（低・中・高学年児童、大学生各37名、17名、38名、46名）	固定視座は、自由視座と比較して、大きく主人公への視座統一度が上昇した（約40%～50%→80%強～約90%）。自身の体験談として出来事を描写させる固定視座では、どの対象者においても、視座統一が認められる。
魏(2010)：JNS(大学生・大学院生88名、CNS 225名(上位群下位群に分別) <sup>8)</sup>	JNSもCNSも視点表現（＝構文的手がかり）の使用量は全ての項目において、＜視座＞の固定をさせた場合のほうが多い。また、CNS上位群は、授受表現と移動表現の使用が自由視座より有意に多く、かつ視点表現の使用が全体的にJNSに近づく。

以上、先行研究についてまとめたが、海外の日本語レベル中級前期・同後期のCNSに限定し、横断的・縦断的に調査した研究はまだ見られない。

#### 4. 仮説

本研究では、以下の四つの仮説を立てた。

1) CNSは、JNSと比較して、自由視座において、「主

人公のみ」の視座から描写する割合が低い、日本語レベル上昇にともない、その割合は上がる。

- 2) 自由視座と固定視座とでは、固定視座のほうが「主人公のみ」の視座から描写する割合が上昇する。
- 3) 自由視座と固定視座とでは、固定視座のほうが構文的手がかりの平均使用回数が増える。
- 4) 自由視座と固定視座とでは、固定視座のほうが主人公からの視座統一度が大幅に上昇する。

以上の仮説は、いずれもこれまでの先行研究の知見を本調査対象者にも援用したものである。第一の仮説については、多くの先行研究で自由視座において、CNSは、JNSに比べ、「主人公のみ」の視座からの描写割合が低いことが指摘されており、かつ、日本語レベルや学習時間と視座統一度との関連性も報告されていることから、本研究においても同様の結果が出るのではないかと予想した。第二の仮説については、JNSを対象に調査した筆者ら（2012）が、自由視座より固定視座のほうが「主人公のみ」の視座からの描写割合が大幅に上がると報告しているため、同様の実態が日本語学習者であるCNSにも観察されるのではないかと考えた。第三の仮説については、魏（2010）で、構文的手がかりにあたる視点表現の使用量が全ての項目で＜視座＞の固定をさせた場合のほうが多いと報告されているので、本研究の対象者にも同じ状況が起こりうると推測した。第四の仮説についても、筆者ら（2012）の結果を、外国語として日本語を学ぶ本研究の対象者にも援用したものである。

## 5. 調査概要

### 5.1 実施時期、及び、対象

#### JNS

・2008年1月：静岡県内T大学の外国語学部所属の1年から3年生46名（男：14名、女：32名）

#### CNS

＜横断的調査＞

- 1) 2007年11月：中国国内G大学の日本語学院所属の2年生26名（男：3名、女：23名）（中級前期）
- 2) 2008年9月：同上3年生31名（男4名、女：27名）（中級後期）

＜縦断的調査＞

- 1) 2007年12月：中国国内S大学の日本語学科所属の2年生10名（男：0名、女：10名）（中級前期）
- 2) 2008年9月：同上3年生10名（男：0名、女：10名）（中級後期）

上記対象者の日本語レベル分けについては、日本語能力試験やS P O Tなどを利用せず、日本語学習時間、および、使用している教科書により、判別したものである。具体的には、横断的調査における中級前期の日本語学習歴は1年2か月で、テキストとして『新編日語1・2』を終え、『同3』を使い始めたところであった。同後期は学習歴2年で、テキストとして『新編日語1～4』を終えたばかりだった。一方、縦断的調査の中級前期の日本語学習歴は1年3ヶ月で、テキストとして『標準日語中級上』を用いていた。同後期は、学習歴2年で、テキストとして『標準日語中級下』を終えたばかりであった。

一般的には、「横断的研究」とは、多数の学習者グループの、ある一時点における言語習得の様子を調査する研究のことである。本研究では、2007年11月に26名を、2008年9月に31名を対象者とした。両者は異なる学習者グループである。多数と呼ぶには人数が少ないが、後述する縦断的研究の対象者と比較すると多いため、本研究では、横断的研究とする。一方、「縦断的研究」とは、少数の学習者の言語習得を長期間にわたって観察、記述していく研究を指す。本研究では、2007年12月に対象者となった10名に対して、2008年9月にも同一の調査を実施した。なお、一回目も二回目も調査の予告はしていない。また、視座を決定する構文的手がかりの習得度合いを測る目的で、筆者が作成した文産出テストを実施した。これは、調査を行うにあたり、予め「授受表現」や「授受」などの構文の手がかりが身につけている者と身につけていない者を判別する必要があるためである。上記対象者は、全員この文産出テスト（単文・複文レベル）において、一定基準をクリアした者である。したがって、本研究の対象者は、漫画のストーリーテリングをさせた結果、たとえ視点上の不自然さが見られたとしても、それは単文、複文レベルにおける構文の手がかりの未習得によるものではないということになる。

## 5.2 調査方法・分析方法

調査対象者に主人公が明確なストーリーのある10コマ漫画（図1）を見せ、まず、日本語で「物語の内容を知らない」人に伝えるように文章で描写させた（自由視座）。次に、中国語で同様に描写させた。その後、同じ漫画を主人公になったつもりで「僕」を使って、日本語で描写させた（固定視座）。そして、同様に中国語で描写させた。各作業で使用した用紙の指示文には日本語と中国語を併記し、作業内容の理解は十分にされている。作業間には、先に描写した日本語や中国語を見ないように指示し、それらが見えないように紙を半分に折って作業にあたらせた。本研究では、中国語での描写についての分析は見送り、日本語での描写のみを分析の対象とする。

図1



視座の定義は、坂本（2005）に倣い、受身形、授受補助動詞、使役受身形、及び、本動詞「くれる／もらう」、「やる／あげる」、「使役形／使役的他動詞」を構文的手がかりとして決定されるものとする。また、先行研究（田代1995；坂本2005；坂本・康2008；筆者ら2009）と合わせて、視座を「主人公のみ」、「主人公と他の人物（一人）」、「主人公と他の人物（二人）」、「主人公以外の人物」、「構文的手掛かりなし」の五つに分類した。<sup>9)</sup>なお、上述したように、調査の最後に、構文的手がかりの習得度を測り、対象者を選別する目的で、文産出テストを実施した。

## 6. 結果と考察

表5は、自由視座におけるJNSとCNSの視座の実態を比較したものである。CNSは、横断的調査（中級前期26名・中級後期31名）と、縦断的調査（中級前期・後期各10名）の結果をまとめた。基準となるJNSの大学生は、「主人公と他の人物（一人）」が43.5%と最も多く、「主人公のみ」の39.1%が続いた。従来文章表現における視座を調査した研究では、JNSは「主人公のみ」が最も多かったのが、異なる傾向を示した。一方、CNSは、横断的、縦断的両調査間で対象グループすべて「主人公と他の人物（一人）」が最多となったが、「主人公のみ」からの描写を含め、その割合は両調査において、開きがある。

横断的調査の「主人公のみ」からの描写は、中級前期が3.8%、同後期が9.7%と低い値であるのに対し、「主人公と他の人物（一人）」の割合は、中級前期84.6%、同後期74.2%と非常に高くなっていた。

縦断的調査の「主人公のみ」からの描写は、中級前期が10%、同後期が30.0%であり、「主人公と他の人物（一

人)」の割合は、中級前期が50.0%、同後期が40.0%であった。

横断的調査と縦断的調査で異なる部分もあるが、JNSに比べ、「主人公のみ」からの視座統一度が低いこと、日本語レベルの上昇や学習時間の増加にともない、「主人公のみ」の視座からの描写割合が上がることは数値上において、共通している。この結果は、日本国内での調査である坂本(2005)、奥川(2007)と台湾での調査である林(2005)と同様であった。これにより、仮説1) CNSはJNSと比較して、自由視座において、「主人公のみ」の視座から描写する割合が低いが、日本語レベル上昇にともない、その割合が上がる、を支持する結果となった。

表6は、固定視座におけるJNSとCNSの視座の実態を比較したものである。

CNSは、横断的調査と、縦断的調査の結果をまとめた。表5の自由視座の結果と表6の固定視座の結果とを比較して、述べる。「主人公のみ」の視座からの描写については、JNSが自由視座39.1%(表5)から固定視座89.1%(表6)で50.0%増、CNS横断的調査は中級前期が3.8%(表5)から46.2%(表6)で42.4%増、同後期は9.7%(表5)から48.4%(表6)で、38.7%増であった。また、縦断的調査も中級前期が10.0%(表5)から40.0%(表6)で、30.0%増、同後期は30.0%(表5)から80.0%(表6)で、50%増であった。このように全対象グループにおいて、大きく統一度が上昇し

たことにより、仮説2)自由視座と固定視座とでは、固定視座のほうが「主人公」の視座から描写する割合が上昇する、を支持する結果となった。したがって、自己投入させること(なりきること)は、母語や日本語レベルを問わず、視座の統一に大きな役割を果たすことが明らかになった。

次に、表6の固定視座に限定して見ていく。基準となるJNSは、「主人公のみ」が89.1%と最も多い。一方、CNSは、横断的調査と縦断的調査間において、中級前期が似た傾向を示し、中級後期が異なる傾向を示した。具体的には、中級前期の「主人公のみ」の割合は、横断的・縦断的調査ともに、40%台であった。このことから、少なくとも、中級前期の段階では、たとえ主人公に自己投入させたとしても、視座を統一させる割合がJNSの半分しかないことが判明した。

ストーリーテリングの指示については、日本語とともに、中国語も併記しているので、「主人公になったつもりで描写する」という意味理解に問題があったとは考えにくい。本研究では、調査方法の章でも、述べた通り、母語での描写もさせている。本稿では、その分析は見送り、日本語での描写のみを分析対象としているため、はっきりしたことは言えないが、自由視座の描写を中国語で行った後に、固定視座の日本語での描写を行わせたことにより、「母語での視座の置き方」が影響している可能性もあるのではないかと推察される。

表5 自由視座 横断的・縦断的調査[中級前期・後期]とJNSの比較人(%)

視座	CNS 横断的調査		CNS 縦断的調査		JNS
	中級前期 26名	中級後期 31名	中級前期 10名	中級後期 10名	
主人公のみ	1 (3.8%)	3 (9.7%)	1 (10.0%)	3 (30.0%)	18 (39.1%)
主人公と他の人物(一人)	22 (84.6%)	23 (74.2%)	5 (50.0%)	4 (40.0%)	20 (43.5%)
主人公と他の人物(二人)	3 (11.5%)	0 (0.0%)	2 (20.0%)	1 (10.0%)	5 (10.9%)
主人公以外の人物	0 (0.0%)	5 (16.1%)	2 (20.0%)	2 (20.0%)	3 (6.5%)
構文的手がかりなし	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表6 固定視座 横断的・縦断的調査[中級前期・後期]とJNSの比較人(%)

視座	CNS 横断的調査		CNS 縦断的調査		JNS 大学生
	中級前期 26名	中級後期 31名	中級前期 10名	中級後期 10名	
主人公のみ	12 (46.2%)	15 (48.4%)	4 (40.0%)	8 (80.0%)	41 (89.1%)
主人公と他の人物(一人)	13 (50.0%)	14 (45.2%)	6 (60.0%)	1 (10.0%)	5 (10.9%)
主人公と他の人物(二人)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
主人公以外の人物	1 (3.8%)	1 (3.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
構文的手がかりなし	0 (0.0%)	1 (3.2%)	0 (0.0%)	1 (10.0%)	0 (0.0%)

表7 構文的手がかりの使用状況 [CNSの横断的・縦断的調査とJNSの比較]

	横断的調査				縦断的調査				JNS 大学生		
	中級前期 26名		中級後期 31名		中級前期 10名		中級後期 10名		46名		
構文的手がかり	自由 視座	固定 視座	自由 視座	固定 視座	自由 視座	固定 視座	自由 視座	固定 視座	自由 視座	固定 視座	
1. 平均使用回数(登場人物三人)	3.8回	3.5回	2.8回	2.8回	2.9回	2.7回	3.3回	2.4回	4.0回	4.5回	
2. 「兄」からの平均使用回数	2.2回	3.0回	1.5回	2.3回	1.6回	2.1回	2.3回	2.3回	3.0回	4.4回	
3. 登場人物別使用割合	兄	58.6%	84.8%	55.2%	81.6%	55.2%	77.8%	69.7%	95.8%	74.5%	97.6%
	母	36.4%	14.1%	44.8%	16.1%	34.5%	14.8%	24.2%	4.2%	20.7%	1.4%
	妹	5.1%	1.1%	0.0%	3.4%	10.3%	7.4%	6.1%	0.0%	4.9%	1.0%

表7は、構文的手がかりの使用状況を、CNSの横断的・縦断的調査の結果とJNSの結果とを比較したものである。1の構文的手がかりの平均使用回数(登場人物三人)は、JNSが、自由視座4.0回、固定視座4.5回と対象グループの中で最も頻度が高く、固定視座が自由視座より使用回数が増えている。一方、CNSは、自由視座の場合、JNSと比較して、概して出現頻度が低い。主人公に自己投入させた固定視座の場合にも、構文的手がかりの使用が増えることはなく、逆に減少することのほうが多い(横断的前期: -0.3回、同後期: +0回、縦断的前期: -0.2回、同後期: -0.9回)。これにより、仮説3)自由視座と固定視座とでは、固定視座のほうが構文的手がかりの平均使用回数が増える、については、JNSは支持され、CNSは支持されない結果になった。

さらに、主人公「兄」からの平均使用回数(表7の2)に目を移す。基準となるJNSは、自由視座3.0回、固定視座4.4回と、全対象グループのうち、最高の値であり、固定視座への移行による伸び率も最も高くなっている(+1.4回)。一方、CNSは、構文的手がかりの使用回数が自由視座、固定視座ともにJNSを大きく下回っており(自由視座: 1.5回~2.3回、固定視座: 2.1回~3.0回)、固定視座への移行による伸び率も概して日本人ほど高くない(横断的前期: +1.2回、同後期: +0.8回、縦断的前期: +0.5回、同後期: +0回)。

以上から、JNSは受身形や使役受身形、授受表現などの構文的手掛かりを数多く使って、主人公の視座から描写する傾向が強いと言える。また、漫画を自由に描写させた場合(自由視座)より「主人公になりきって(自己投入させて)」描写させた場合(固定視座)のほうが、より主人公の視座に立つ回数が増えることが判明した。他方、CNSは、JNSに比べ、主人公「兄」からの構文的手がかりの使用回数が明らかに少なく、また、固定視座へ移行しても、その回数はJNSのように増加することはないことがわかった。

CNSを上位群、下位群に分け、調査した魏(2010)では、上位群は、授受表現と移動表現の使用が自由視座より有意に多く、かつ視点表現(=構文的手がかり)の使用が全体的にJNSに近づくとしていた。しかし、本研究における上位群である中級後期の対象者は、固定視座のほうが自由視座より使用回数が増えるといった実態は観察されなかった(横断的+0回、縦断的-0.9回)。魏(2010)と本研究では、視点表現(=構文手)が異なる部分があるため、単純に比較はできないが、魏(2010)の対象者のCNSには、日本語能力試験1級合格者が70名含まれており、平均学習歴も3.5年と長い。つまり、CNS上位群には、いわゆる上級レベルの学習者が多くと推察でき、単文、複文レベルを超えた談話においても、用いることができるようになっているのではないかと考えられる。一方、本研究の対象者は、日本語学習歴が約1年弱から2年の中級前期・後期の者であるゆえ、談話レベルで自在に使いこなせるまでに熟達していない可能性がある。例えば、自由視座において、「母が兄に掃除をさせた」と使役形を使って、母の視座から描写していたコマは、固定視座では、「僕は母に掃除させられた」と使役受身形を使用しなければならなくなる。しかし、この場合、談話の中で難しい言語形式を避け、「母は僕に掃除しなさいと言った」などを用い、「使役受身形」の非用が観察された。このような非用が原因の一つにあるのではないかとと思われる。この実態は、中級前期も同様だった。また、下位群より上位群のほうが視点表現(=構文的手がかり)の使用がJNSに近づくとする魏(2010)に従うならば、本研究においても、中級前期より後期のほうが増えるはずである。しかしながら、そのような傾向は観察されなかったことから、中級においては、レベル上昇にともない、使用頻度が伸びることはなく、上級になってはじめて、JNSに近づいていくのではないかと推論できる。

表7の3の登場人物別構文的手がかりの主人公「兄」

の使用割合を、自由視座から固定視座への移行の結果に焦点を当て、述べる。JNSは自由視座74.5%から固定視座97.6% (+23.1%)と大きく使用割合を伸ばしている。この傾向は、CNSにも同様に観察される。CNSの横断的調査、中級前期は58.6%から84.8% (+26.2%)、同後期は55.2%から81.6% (+26.4%)、縦断的調査、中級前期は自由視座55.2%から固定視座77.8% (+22.6%)、同後期は69.7%から95.8% (+26.1%)と、どの対象グループも約25%前後伸びている。以上より、仮説4)自由視座と固定視座とでは、固定視座のほうが主人公からの視座統一度が大幅に上昇する、を支持する結果となった。このことから、ストーリーのある漫画の描写をさせる際に、意図的に視座を固定させる(自己投入させる)指示を与えれば、日本語レベルに関係なく、主人公への言及度を高めることができると言えるだろう。しかし、縦断的調査の中級後期以外は、固定視座がJNSより約15%から20%低い数値となっており、構文の手がかりを用いて、主人公以外の登場人物の行為も描写する傾向が観察される。

縦断的調査の中級後期のみがJNSに近い値になった点だが、中級前期(8か月前)の調査の翌日に、添削した対象者の描写文を返却している。添削の際には、視座に関わる不自然さの指摘は一切行わず、間違いの訂正にとどめた。また、二回目の調査も予告なしに実施したので、一回目に返却された用紙を見返し、準備をしていたとは考えられない。しかしながら、前回の調査に対する慣れが今回の結果に何らかの影響を与えた可能性も完全には否定できない。

## 7. まとめ

本研究では、中国国内の中国人日本語学習者(中級前期・中級後期)を対象に、日本語で「物語の内容を知らない人」に伝えるように文章で描写させた場合(自由視座)と、主人公になりきって描写させた場合(固定視座)について、横断的・縦断的に視座形成の実態を調査した。データの分析に統計的手法を用いていない点が問題として残るが、数値上において、明らかになったことを以下に、まとめる。

第一に、自由視座の場合、CNSは、JNSに比して、「主人公のみ」の視座から描写する割合が低いが、日本語レベルの上昇にともない、統一度は上がる。この点は国内(坂本2005、奥川2007)、海外(林2005)の調査を行った先行研究を支持する結果となった。

第二に、JNSもCNSも固定視座のほうが自由視座と比較し、大きく「主人公のみ」の視座から描写する割合が上がる。このことから意図的に視座を固定させるこ

と(自己投入させること)は、視座の統一に大きな役割を果たすと言える。この点は、JNSについて調査した筆者ら(2009、2012)の結果がCNSにも応用されることが証明された。しかしながら、中級前期のレベルでは、固定視座において、JNSとの間に視座の置き方に大きな差があることが明らかになった(CNS中級前期:40%台、JNS:約90%)。

第三に、構文の手がかりの平均使用回数(全登場人物)について、CNSはJNSに比して、出現頻度が低い。また、JNSは固定視座のほうが自由視座より増加するのに対し、CNSは増えることはない。談話レベルで十分に構文の手がかりを使いこなせず、非用となってしまうことがその原因の一つとして考えられる。

第四に、JNSは、CNSと比べ、自由・固定視座の両方において、受身形や使役受身形、授受表現などの構文の手がかりを数多く使って、主人公の視座から描写する傾向が強いと言える。その傾向は、固定視座では、より強まり、ほぼ完全に主人公の立場に立った叙述ができることが判明した。他方、CNSは、固定視座に移行することにより、主人公の視座から描写する割合は高まるが、その程度は概ねJNSより低い値に留まり、主人公以外の登場人物の行為を描写する傾向が観察される。また、構文の手がかりの使用はおおよそ微増するが、伸び幅もやはりJNSより小さい。

## 8. 日本語教育との関わりと今後の課題

筆者らは、日本国内で学ぶ日本語学習者とともに、自然な日本語のインプットの少ない海外の学習者を対象に、視座形成の実態調査を進めている。本研究では、中国大陸の日本語レベル中級前期・同後期のCNSを対象を限定して、横断的・縦断的に調査を行い、結果をまとめた。

本研究に限って言えば、「物語の内容を知らない人」に伝えるように文章で描写させる場合(自由視座)においては、CNSは、JNSよりも「主人公のみの視座からの描写割合」「主人公に言及する割合」ともに概して低い。日本語レベル向上によって、「主人公のみの視座からの描写割合」は上昇するが、それでも、JNSよりも低いという結果であった。このように、CNSの視座に関する問題は自由視座にも存在するようである。しかし、先行研究(田代1995:60%、坂本2005:70%、坂本・康2008:約60%など)と比較すると、基準となるJNSの同割合は高くない(39.1%)。筆者ら(2012)が述べるように、自由視座における視座統一の形成の度合いは、漫画のストーリーや登場人物の描かれ方に影響を受けやすい可能性がある。このことから、自由視座におい

ては、視座を主人公に固定させるような指導の実施には慎重さが求められるだろう。

一方、主人公になりきって（自己投入させて）描写させる場合（固定視座）、JNSは、「主人公のみの視座からの描写割合」は約9割に達し、「主人公に言及する割合」に至っては、ほぼ100%に近い値となっている。筆者ら（2012）は、小森（2006）の「必ずしも文章全体を通して視座を統一しなければいけないわけではないため、どんな場合に視座を移動させてもよいのかという基準が出せない」に対して、それは「自由視座」のケースにのみ該当することだと述べているが、本研究JNSの固定視座の値はその主張を裏付けるものとなった。本研究のCNSは、固定視座において、中級前期の段階では、JNSに比して、「主人公のみの視座からの描写割合」が大変低いことが明らかになった（JNS：約90%、CNS中級前期：40%台）。

同時に、自由視座に比べ、固定視座のほうが「主人公に言及する割合」が高まるが、概ねJNSより低い傾向があること、また、自由視座において少なかった受身形や授受表現など構文的手がかりの使用回数は、固定視座へ移行しても、増えることはないことが示された。

以上をふまえ、中国の大学で日本語を学ぶ中級レベルの学習者に対する視座統一に関する指導案の構想を次に示したい。一般に、初級修了レベルでは、構文的手がかりの習得が十分になされていない学習者の割合も高いことが想定される。本研究でも、その定着を測る文産出テストを実施したが、一定基準をクリアできず、研究対象から除かれた者が多かった。したがって、中級レベルにおける視座統一の指導は、まず、初級で学習した受身形や使役受身形、授受表現などの構文的手がかりを単文、複文レベルで十分に復習すること、次に、主人公の明確なストーリーのある漫画を材料に、自らの出来事として捉えて適切に構文的手がかりを使って描写させる、というように段階を踏んで指導するとよいだろう。学習者のレベルが低い場合には、漫画の描写に入る前に、視座に関わるコマについて、「見る場所（＝どこ（何）から見るのか）」を一つ一つ確認するステップを挟み込むと書きやすくなると思われる。このようなトレーニングを重ねた上で、日記や作文で自分自身に起こった出来事について、自らの視座に立って描写する段階へと進むというのではないだろうか。場合によっては、筆者ら（2012）にあるように、主人公の明確な物語を材料に、視座の置き方を確認しながら読み進めるといった教室活動も取り入れるといいだろう。

今後の課題であるが、二点挙げられる。第一に、中国語での描写を分析することによって、母語干渉の可能性を探ることである。韓国語母語話者（以下KNS）につ

いて調査した金（2001）では、KNSの産出する日本語とJNSの談話構成における主語と動詞の用い方の違いは、日本語と韓国語のものごとのとらえ方の違い、すなわち目標言語と母語との間の異なる視点的傾向が反映された結果であるとしている。その違いが一種の母語干渉として学習者の中間言語に影響を及ぼしている述べている。CNSにおいても、「視座形成」において、何らかの母語干渉が観察されないかを調査することは大きな意味があると考え。第二に、他言語話者についても、視座形成の実態を調査することである。今回明らかになった問題点がCNS特有のものであるのか、言語に関係なく観察されるものであるのかを知ることは、学習者の母語を考慮に入れた指導の在り方を探る上で意味があると考え。筆者らは英語母語話者について、調査を行ったので、今後その成果を発表していきたい。第三に、今回対象としなかった「注視点」（「見られる客体（対象）」「どこ（何）を見るのか」）の分析を進めることである。注視点についても、JNSおよび、CNSの特徴を明らかにすることによって、「視点形成」の実態が見えてくると思われる。

#### 注

- 1) 武村（2010）では、JNS、CNS共に、パーソナル・ナラティブでは、「私」に視座を固定しているのに対し、口頭による漫画描写においては、両者ともに、視座の固定はほとんど観察されないとしている。
- 2) 奥川（2007）は、上級になっても、わずかに上昇したのみであると否定的に述べている。
- 3) 「自由視座」という用語は、筆者ら（2009、2012）が定義したものだが、先行研究における「その内容を知らない人」に説明するように自由に描写する、と同じことを指し示すと考え、本研究では、「自由視座」と呼ぶことにする。
- 4) 田代（1995）は、韓国語母語話者についても同様に調査している。
- 5) レベル分けは、SPOT（Simple Performance-Oriented Test）を使用している。
- 6) 魏（2010）では、対象者の描写において、視座を登場人物に固定させている場合を「固定視座」としている。また、同研究では、「自由視座」という用語は使用していないが、「特に制限なく自由に書く」は、筆者ら（2012）の「ストーリー性のある漫画を自由に描写させた場合」とほぼ同義と考え、本稿では、「自由視座」と呼ぶことにする。
- 7) 魏（2010）の「視点表現」とは、本研究における構文的手がかりに該当するものである。魏（2010）では、

中浜・栗原（2006）の知見を援用し、受身表現、授受表現、移動表現、主観表現、感情表現を「視点表現」として挙げている。

8) レベル分けは、SPOT とクローズテストを用いて行っている。

9) 田代（1995）では、漫画の登場人物が四人である。本研究の視座の種類のうち、「主人公と他の人物」が「主人公と他の人物（二人以上）」、「主人公以外の人物（二人）」が「主人公と他の人物（二人以上）」となっている。

### 参考文献

- 奥川育子（2007）「語りの談話における視点と事態把握」『筑波応用言語学研究』14号、pp.31-43。
- 魏志珍（2010）「台湾人日本語学習者の事態描写における視点の表し方—日本語の熟達度との関連性—」『日本語教育』第144号、pp.133-144。
- 小森万里（2006）「中級作文におけるわかりにくさの要因—結束性、卓立性を支える要素をめぐって—」『山口幸二教授退職記念論集』、197-216。
- 金 慶珠（2001）「談話構成における母語話者と学習者の視点—日韓両言語における主語と動詞の用い方を中心に—」『日本語教育』第109号、pp.60-69。
- 坂本勝信・康鳳麗（2004）「英語母語話者の視点の実態を探る—視座の統一度に差のある文章に対する日本語母語話者の判断調査と共に—」『平成16年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp.239-244。
- 坂本勝信（2005）「中国語を母語とする日本語学習者の「視点」の問題を探る」『常葉学園大学研究紀要（外国語学部）』第24号、pp.208-217。
- 坂本勝信・康鳳麗（2008）「日本語母語話者の視点の実態について—「視座の統一度と文章のわかりやすさの関係」調査と共に—」『常葉学園大学研究紀要（外国語学部）』、第21号、pp.1-11。
- 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫（2009）「中学年の日本人児童の物語描写における「視座」の実態について—日本人大学生との比較を通して—」『常葉学園大学研究紀要（外国語学部）』第25号、pp.205-213。
- 坂本勝信・康鳳麗・森脇健夫（2012）「日本人児童の文章における視座形成の実態」『浜松大学研究紀要』第25号、第1号、pp.81-89。
- 武村美和（2010）「日本語母語話者と中国人日本語学習者の談話に見られる視座—パーソナル・ナラティブと漫画描写の比較—」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部、第59号、pp.289-298。
- 田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点—不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる—」『日本語教育』第85号、pp.25-37。
- 中浜優子・栗原由華（2006）「日本語の物語構築：視点判断する構文的手がかりの再考」『言語文化論集』27巻、第2号、pp.97-107。
- 松木正恵（1992）「「見ること」と文法研究」『日本語学』11巻、9号、pp.57-71。
- 林 美棋（2005）「中国語を母語とする日本語学習者の談話展開における視点の習得研究—台湾人日本語学習者を対象に—」『Sophia Linguistica』第53号、pp.33-48。
- 渡邊亜子（1993）「中・上級日本語学習者の談話展開—「視点」と接続表現からの考察—」『日本語シンポジウム言語理論と日本語教育の相互活性化予稿集』、pp.55-69。